最終提出：2022/04/11

マラヤ大学オンライン研修
体験報告書（2022 年春）

SoSHIP

（Social Science and Humanities Immersion Programme）

経済学部２年　栗原考平
法学部２年　曽我部沙也加
工学部３年　藤田修平
文学部２年　増田千夏
農学部１年　森下理帆
工学部１年　矢澤佐千生

目次

1．マラヤ大学の紹介 p2

2．プログラムの概要 ..... p2~6

（1）プログラムのスケジュール.....p2
（2）授業科目.....p3
（3）Activities & Ceremonies.....p5

3．プログラムのハイライト ..... p7~10

経済学部２年　栗原考平　「心理学を自分事として考える」.....p7
法学部２年　曽我部沙也加　「オンライン留学と国民性の親和」.....p7
工学部３年　藤田修平　「バディとのかけがえのない時間」.....p8
文学部２年　増田千夏　「『日本フィルター』を自覚して」.....p8
農学部１年　森下理帆　「歴史的背景に基づく論理的思考力の高さ」.....p9
工学部１年　矢澤佐千生　「自分から考える、双方向的な授業」.....p9

4．体験・学習効果 ..... p10~16

経済学部２年　栗原考平　「英語で学んでみて見えた『留学をする理由』.....p10
法学部２年　曽我部沙也加　「開放的なショートプログラム」.....p11
工学部３年　藤田修平　「自身の快適域を抜け出すことの大切さ」.....p12
文学部２年　増田千夏　「他の文化への寛容性と配慮」.....p13
農学部１年　森下理帆　「自分の内面に対する気づきと成長」.....p14
工学部１年　矢澤佐千生　「３週間で得られたもの」.....p15

１．マラヤ大学の紹介

首都クアラルンプールに位置するマレーシアで最初に設立された大学である。マレーシア最高峰の大学でもあり、QS アジア大学ランキング 2021 では 9 位、QS 世界大学ランキング 2021 では 59 位にランクインした。17 の学部があり、学部生と大学院生を合わせると 26,000 人以上が在籍している。「A global university impacting the world」という目標を掲げており、多様な民族の生徒が集まる国際色豊かな大学である。

２．プログラムの概要

（１）プログラムスケジュール

SoSHIP（Social Sciences and Humanities Immersion Programme）はマラヤ大学の主催する３週間のオンライン留学プログラムである。月曜から金曜まで授業や交流イベントが開催され、自宅にいながら留学を体験できる本格的なプログラムとなっている。使用言語は英語、講義内容は人文科学が主であった。日本人学生２名に対して現地学生１名がバディとして割り当てられており、講義やイベントに一緒に参加してくれる。授業についていけない、宿題が終わらない等困ったことがあれば、彼らに相談すると親身に対応してくれる。

一日の活動は、Morning Class, Afternoon Class, Evening Activity から成る。１時間の時差があるため、午前講義の開始時間は遅めだが、空きコマは週２コマ（10 コマ中）のみであり、隔日で Evening Activity が開催されるため、多くの時間をプログラムに費やすことになる。

授業は必修の２科目（Malaysian Studies/Seminar Series）以外に２科目を選択し、計４科目を履修する。履修科目以外を聴講することもできる。成績評価は課題型とテスト型の２種類があり、授業により異なる。本レポートを参考にして選択科目を検討してもらいたいが、今年度とは内容等が異なる可能性も十分にある。

授業以外のアクティビティは自由参加だが、殆ど全員が参加しており、特段事情が無い限りは参加した方がプログラムを満喫できる。隔日のアクティビティが無い日には、バディと相談して個別に交流することもできる。SoSHIP と同時開講の別プログラムの学生と合同で行う、50 人前後の大規模なイベントが開催されることもある。

1 週間のスケジュール

DAY \ TIME	08.30 – 09.30	09.30 – 10.30	10.30 – 11.30	11.30 – 12.30	12.30 – 13.30	13.30 – 14.30	14.30 – 15.30	15.30 – 16.30	16.30 – 17.30
Monday	Malaysian Studies		BREAK	Adolescence Psychology		BREAK	Activities with i-Smart Buddies		
Tuesday	Politics & International Relations			Seminar Series					
Wednesday	Adolescence Psychology			Film Studies					
Thursday	Seminar Series			Politics & International Relations					
Friday	Film Studies			Malaysian Studies					
Saturday									
Sunday									

- Indicated time is referring to Malaysia Standard Time (MST)
- All synchronous teaching and learning activities utilise Zoom Meeting application.

（2）授業科目

Malaysian Studies

必修科目の一つであり、もう一つのプログラムの生徒やバディと合同で受講した。マレーシアの一般的な概要から民族、宗教、祭日、結婚様式、伝統衣装、観光地まで、あらゆる文化を 5 回の授業で学び、最後の授業では試験を受けた。授業では質疑応答やディスカッションの時間が多く、現地の学生とも交流を深められるので、文化交流としても貴重な機会であった。

Seminar Series

この授業は週に 2 度、毎回異なる講師による様々なトピックについて講義が行われた。必修であったが成績評価のためのテストやレポートはなく、計 6 回、以下の内容について学んだ。講義後には、講師に対して質問を行う時間が設けられ、各自思い思いに質問を行った。

今回行われた講義のタイトル・講師名は次のとおりである。

“Youth and women empowerment in Malaysia”（Dinie Fadil）
“Media and society: reacting to the events of creating them?”（Nur Hakimah Adilah）
“The political economy of transboundary haze in Malaysia and Southeast Asia”（Dr. Helena Varkkey）
“Financing and readiness of climate risk deduction”（Shaqib Shahril）
“Representations of gender identities in literature: madeline miller”（Aishah Ahmad）
“Wildlife trade and trafficking in Malaysia”（Aidil Iman Aidid）

Adolescent Psychology

選択科目の一つ。人間の心理的発達について、特に少年・青年期に重点を置き、幅広く取り扱う。幼児期の親との関わり方が精神に及ぼす影響、精神疾患の特徴と対処方法など、専門的な用語を取り扱うことも多く、語彙の難易度は他の授業に比して高めだが、全体としてはそれほど難しい内容ではない。ストレスコーピングや友人関係、育児のいろは等、学んだことを実生活に直接生かすことができる科目であった。

毎週レポート課題が指示され、A 4 用紙の上限 2 ～ 3 頁程度の分量で自分の考えのアウトプットを求められた。SoSHIP 全体を通して英語を書く機会はあまり多くなく、授業の難易度もそれほど高くないため、4 技能を平均的に鍛えたい人や、将来的に長期の留学を考えている人、実際の留学生活に近い経験がしたい人にとっても本格的に取り組むことができる科目である。今春のプログラムでは履修人数が少なかったため、アットホームな雰囲気で取り組むことができ、発言や交流の機会も多かった。

Film Studies

選択科目の一つであり、客観的視点から様々なジャンルの映画を分析・考察するという内容であった。この授業では、基本的に毎回の課題を踏まえて授業が展開されていた。そこで、以下の表に、各回の授業内容と課題について記す。

表　Film Studies の授業内容と課題

講義回次	授業内容	次回授業への課題
初回	・社会的知識の情報源 ・人々が映画を観る理由 ・分析手法	・「なぜ人々は犯罪/暴力映画を観るのか？」を考える
第 2 回	・犯罪/暴力映画	・“If Only”（恋愛映画）の表現分析
第 3 回	・恋愛映画	・次回の Quiz の勉強
第 4 回	・Quiz ・アニメーション映画	・グループ発表の準備
第 5 回	・グループ発表と講評	・個人発表の準備
最終回	・個人発表と質疑応答	

先生はとても気さくで、英語も非常に聞き取りやすかったため、分からないところを質問しやすい環境であった。また、授業の雰囲気も終始和やかで、先生は生徒への質問や課題を通して議論を楽しんでいるようであった。

映画は自分たちの日常の一部に組み込まれており親しみを覚えるが、多くの場合ではストーリー自体を楽しむことに焦点を当てている。しかし、Film Studies では、「なぜ人々は映画を観るのか？」、「この映画が伝えたいことは何か？」、「このシーンは何を意味するか？」といった映画に対する批判的な分析を行う。そのため、この授業は映画の根幹部分に触れられる貴重な機会である。

Politics＆International Relations（以下 Politics＆IR）

主権国家という概念の登場から冷戦終結までの国際政治の歴史とそれに関係する主義主張について、大まかな流れを学んだ。1時間半程度の講義のあとは、関連したテーマについてのディスカッションやディベート、または質疑応答が行われた。加えて Google Form による 20 分程度の、講義資料に則った試験が 2 回と、先生からの質問にその場で回答する形式の試験が行われた。

見やすい資料と体系的な講義であり、予備知識がなくても流れに沿って整理しながら学ぶことができた。また内容の切れ目ごとにこまめに質問の機会が設けられ、質問に対して丁寧に解説をもらえるため、しっかりと授業についていくことができた。ディスカッションやディベートでは主体的に考えることができ、より理解が深まった。

（3）Activities & Ceremonies

Orientation

プログラム開始前の 2 月 1 1 日に行われた。主な内容は、プログラム責任者の先生の挨拶、自己紹介、アイスブレイクであった。会の最初の方は緊張感が漂っていたが、「2 truths and a lie」や「意味推測ゲーム」のようなアイスブレイクを経て、バディや日本人学生との距離が少しずつ縮まっていった。

Evening Activities

授業後の午後 4 時ごろから週に 2 ～ 3 回行われた。初回は Funny Debate で、身近な話題について英語で楽しく討論した。第 2 回では与えられた語数にアルファベットを埋めて正解の単語を当てる Hangman というゲームをした。第 3 回ではお題に沿ってストーリーを考え、全員で文章をつなげていく Story Chain をした。第 4 回には LINE グループ内で食べ物やそれぞれの国ならではの写真を送り合って交流を深めた。第 5 回はジェスチャーで単語を当てるゲームをした。他にも、有志で集まって人狼ゲームをしたり、イラストと文章で交互に繋げていく伝言ゲームのような遊びをしたりして、バディや他の参加者との交流を深

めた。また、全体が集まる予定がない日であっても、バディとの日程が調節できれば交流することは可能である。

Food Mania & Traditional Fashion Show

もう一つの留学プログラムと合同で開催された。参加者一人ひとりに時間が与えられ、互いの国や民族の料理や衣装について紹介し合った。写真や動画を見せる人もいれば、実物を食べたり着たりして紹介する人もいた。マレー系、中国系、インド系といった、普段あまり目にしない多様な食文化・衣装に親しむことができた。伝統衣装に身を包んだ参加者は普段よりも格好良く見え、また食べ物も見ているとお腹が空くような、美味しそうなものばかりであった。最後には最も注目を集めた発表者が数名選ばれて表彰されるなど、大変盛り上がりのある催しだった。

Talent Show

このアクティビティも、もう一方のプログラムと合同で行われた。参加者が個人個人に自分の特技をその場で披露したり、オンライン上で紹介したりした。チャット欄やスタンプなどで反応を行いながら、それぞれの発表を楽しんだ。中身は武道・絵画・楽器の演奏などさまざまであり、私はマレーシアでも人気の日本人歌手の歌を披露した。最後に、各自が良い特技を披露した人を選び、多くの票を集めた人は後日表彰された。

Closing Ceremony

プログラム最終日の３月４日に行われた。主に２部構成であり、前半はもう一つのプログラムの生徒と合同で、プログラム責任者の先生や各授業担当の先生、そしてバディ代表からコメントをいただいた。一方で、後半は各プログラムに分かれて行った。そこでは、一人ずつが全体に向けてコメントする時間が設けられ、互いに感謝の気持ちを伝えあった。また、現地バディたちが作ってくれたビデオを鑑賞し、プログラム中の様々な思い出を振り返ることができた。

３．プログラムのハイライト

心理学を自分事として考える（経済学部２年　栗原考平）

私がプログラム中、最も印象に残った授業に Adolescence Psychology がある。授業の中身は、人間の成長・子育てと人格形成・アイデンティティなど多岐にわたったが、その一つ一つを講義・ディスカッション・課題から考えることができた。人間の内面は直接観測することができず、私も深く考えたことがなかった。それでも先生はそれをなるべく言語化し、例を多く用いて私たちに伝えてくれた。これにより、心理学のイメージが、よくわからない専門分野から、より身近な方へと変化していったように思う。

また、この授業の特徴的なスタイルとして、正解のない問いかけがある。人格形成や性格など、人間の内面へのかかわり方には、確固な正解が存在せず、とても繊細な問題である。先生はよく、人間に起こる心理学的な問題へのアプローチを紹介した後、「あなた自身ならこの問題をどう解決するか」と問いかけた。これについてよく考え、授業の内容も踏まえて発言することにより、心理学をただの学問だけでなく、より身近に起こりうる問題として捉えることができた。

オンライン留学と国民性の親和（法学部２年　曽我部沙也加）

マラヤ大の学生は皆とても親切で明るく、ユーモアに満ちており、笑いが絶えない３週間だった。私の目的は、将来の留学に備えて英語での授業を経験することであったが、期待を遥かに上回る充実した時間を過ごすことができた。マレーシア人の性格は、引っ込みがちな日本人と相性がとてもよく、オンライン特有の緊張感を感じることもなく、終始和やかかつ楽しい空気で過ごすことができた。

春季オンラインプログラムの募集があった際、アメリカやイギリスのプログラムはすぐに埋まったものの、マラヤ大学のプログラムは定員に余裕があった。プログラムの拘束時間が長いことからハードルが高いと感じたり、ネイティブとの会話の方がよいと考えたりする人が居たのかもしれないと思う。しかし私は、英語に不安のある人にこそ SoSHIP を勧めたい。

ノンネイティブ同士の会話では、些細なニュアンスで相手に不快感を与えるという心配が少なくて済むため、発言に臆する必要はない。また、例え授業時間に苦労したとしても、やる気さえあれば、イベントやアクティビティでは必ず楽しい思い出を作ることができる。オンラインでこれほど充実した経験ができたのは、ひとえにマレーシアという国の温かさのおかげだと感じた。留学を迷っている人、英語には自信がないが外国に行ってみたい人、春休みを充実させたい人、全ての人に向けてお勧めできるプログラムである。

バディとのかけがえのない時間　（工学部３年　藤田修平）

SoSHIP においては、日本の学生２人に対してバディ１人がつくシステムになっており、バディが３週間ずっとサポートしてくれる。バディとは、授業はもちろんのこと、午後のアクティビティなどでも一緒になるため、ほぼ毎日顔を合わせ、たくさん話すことができる。ここでは、バディとの交流の中で印象に残ったことの中から２つのエピソードを紹介する。

はじめに、夕方にバディ含め３人で交流しているときの話を共有する。自分のバディは日本の歴史や文化に興味があったため、「明治維新についてどう思うか？」という質問を投げかけてきた。この質問は正直驚きを感じるものであったが、自分にある気づきを与えてくれた。それは、自分が今まで日本の歴史を学んだ通りに把握しているだけで、歴史的事実に対して意見を持つことをしてこなかったということである。これは、Politics and IR の授業にも当てはまるが、現地の人たちは、ある出来事について自身がどのような見解を持っているかに関心を寄せていると感じた。何に対しても自分なりの意見をもつことの大切さが身に染みた瞬間であった。

次に、授業の中でのバディとのやりとりを紹介する。先生からの質問に答えようとしたときに、他の生徒と声が重なったので、自分は遠慮してミュートにした。すると、直ぐに「何か言おうとしていたよね？シュウヘイの意見を待っているよ。」とバディが言ってくれた。これは小さな気遣いかもしれないが、自分にとってはとても嬉しかった。また、これがきっかけで自分は授業で意見を言うことに抵抗や不安がなくなった。

このように、バディは情熱と思いやりにあふれており、たくさんの気づきや学びを自分に与えてくれた。充実した３週間を過ごせたのは、間違いなくバディのお陰であり感謝の気持ちしかない。また、Closing Ceremony のビデオなどバディたちのおもてなし精神には圧倒されるばかりであった。

「日本フィルター」を自覚して（文学部２年　増田千夏）

SoSHIP では Seminar Series という授業で社会問題を学ぶ機会がある。これは日本でも学ぼうと思えば学べる科目だ。今回取り上げられたテーマは、おそらくこれまで学校教育を受ける上で、幾度となく話題になっただろう。しかし今回授業を受けて、改めて外国で社会問題を学ぶ意味について感じることがあった。

それは世界の状態や、社会問題を俯瞰して見ることができるということだ。日本で社会問題に関する授業を受けた場合、それは日本の社会問題を話題にしていることが多い。世界的な問題であっても「日本ではどうか」という話題に帰着するだろう。また日本人が日本語で話している内容というのは、それだけで日本の目線というフィルターがかかる。このフィルターはもちろん悪いものではないが、この視点があるといつまでも日本に関係のある問題にしか触れられない。

しかし今回マレーシアの大学で授業を受けることで、私は初めてマレーシアの社会問題について考えることになった。社会問題自体は日本でも共通している話題が多かったが、信仰している宗教や自然環境の違いなど、日本にはない背景事情が、その問題を複雑化していた面もある。これは私が日本で話を聞いていたら手に入らない情報であり、とても興味深く思ったと同時に、「日本ならこうするのかな」とやはり日本基準で考えてしまう自分にも気が付いた。自分にフィルターがかかっていることを自覚しながら、世界の社会問題を客観視して考えられることが、このプログラムの面白いところであるはずだ。

歴史的背景に基づく論理的思考力の高さ（農学部 1 年　森下理帆）

プログラムを通して最も印象深かったのは、歴史的な文化の違いとそこから生じる考え方の違いだ。私が受講していた授業の一つに Politics &IR という授業があり、その授業では毎回授業内容に関するディスカッションなどを行い、生徒同士で様々な意見を出し合った。初回の授業では、International Relations の概念や歴史的背景について学び、その授業に関してどういった考えを抱いたかバディと議論を交わした。授業では植民地支配についても触れていた。私は植民地支配について否定的な意見を持っていた。そのことについてバディに話すと、彼女は「もしマレーシアがイギリスの植民地になっていなかったら、今ほど発展していないかもしれない」と話し、とても肯定的な考えを持っていた。育ってきた国や文化、学んできたことが異なれば、考え方も異なるのは当たり前かもしれないが、教科書的な考え方ではなく、自国の歴史になぞらえ、現在の状況も照らし合わせて考えているのがとても印象的だった。他のマレーシアの学生とも話をしたが、皆それぞれ説得力のある論理的な意見を持っており、論理的思考力の高さに驚いた。それと同時に、日本の教育でも、こういった力を鍛えるディスカッションやディベートなどを多用するべきなのではないかと改めて強く感じた。

自分から考える、双方向的な授業（工学部 1 年　矢澤佐千生）

本プログラムの授業は、ただ受動的に知識を受け取るのではなく、それをもとにして自ら考えたり議論したりするという側面が大きかったと感じる。例えば Politics & IR では「ヴェルサイユ条約のドイツに対する処分は重すぎたのか」などのテーマについてディスカッションが度々行われた。今まであまり考えたことのないテーマについて真剣に考える機会となったほか、他の参加者の考えもとても興味深かった。自分とは異なる意見にもはっとさせられるものが多くあり、より多くの視点で物事を見られるようになったと感じた。また Film Studies では実際に映画を見て、最終的にはそれに対して一人ひとり 10 分ほどのプレゼンテーションをした。このなかでは学んだことを使って、映画に込められたメッセージなどを分析した。

Malaysian Studies や Seminar Series は講義形式の授業ではあったが質疑応答の時間が長めに取られていた。この時間には現地の学生も日本人学生もとても意欲的に質問をしていて、日本の大学の授業よりも質問のしやすい雰囲気となっていた。発表者も積極的に詳しく回答していて、長いものでは 1 時間以上も質疑応答が続くことさえあった。

このように本プログラムでは学生と教師、または生徒間で相互に交流があり、また生徒側が主体的に活動する場面が多くあった。このため授業の内容をより深く自分ごととして考えることができ、また授業に参加している実感が強く得られ、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

４．体験・学習効果

英語で学んでみて見えた「留学をする理由」（経済学部 2 年　栗原考平）

今回私が SoSHIP のプログラムの中で印象に残ったのは、「英語を使って学ぶ」点である。このことは開始前から字面では理解していたが、いざ始まるとその意味をより強く認識した。このプログラムでは、英語を学びに行くのではなく、英語で現地の学生とディスカッションを行ったり、専門家からレクチャーを受けたりする。ここでの英語は、伸ばしていくような自分の能力ではなく、あくまでコミュニケーションツールに過ぎない。

そのため、マラヤ大学の学生は、間違った文法の使い方や語法には寛容であるし、私たちも寛容であった。正しく話すこと以上に、話すこと、つまり自分の意見や思っていることを公開することがより求められる。このことは留学を一度もしたことがなかった私にとって、とても貴重な経験であった。私は、とにかく自分の聞きたいことを聞く、話したいことを話すことをモットーに 3 週間を過ごした。最初のうちは、質問をすることをためらってしまうこともあったが、日ごとに雰囲気がよくなり、だんだん話すことへの抵抗がなくなり、充実した 3 週間を過ごすことができた。

日本における英語学習においては、英文法の勉強を重視し、正しく話すこと・書くことが求められてきたように思う。しかし、留学をする上でそれ以上に重要なのが、英語で話そう・勉強しようというマインドではないかと考えている。このマインドを持てるのが留学プログラム、特に SoSHIP の魅力であろう。

また、私はこのプログラムを通じて、留学に対する新しいイメージを持つことができた。私はこれまで、「純粋に英語ができるようになりたいと思っている人が留学をする」と思っていた。経済学部の中にもこれから留学に行く人、行こうと思っている人が多くいるようである。留学に行くと就職で有利であるとか、語学力がつくからとりあえず留学するべきなどといった、本当かどうかも怪しい話も私の耳に多く聞こえてきていた。私は「なぜみんなこぞって留学を肯定するのだろうか」と留学に懐疑的であった。また、私は日本で経済学を学

び、大学生活を充実させたいと思っていたので、単なる語学能力向上のためだけの留学には否定的だった。しかし、今回のプログラムで、「英語で自分の専門分野を学び、現地の学生との交流を通じて見識を深める」という、私の中の新しい留学のイメージをつかむことができた。また、海外の経済学や経営学の専門的な研究機関で学んでみたいとも思うようになった。これが私にとって、留学に行く理由になった。

私のように、語学能力を伸ばすよりもむしろ、本当に留学先で専門的な勉強をしたい人・海外で活躍したい人がいるだろう。そのような人にとって、SoSHIP のオンライン留学プログラムは、現地で得られる経験を疑似体験できる良いものであると思う。

開放的なショートプログラム（法学部２年　曽我部沙也加）

留学には様々な壁がある。英語力、資金、成績、就職活動、親の反対、感染症など、様々な理由のために、留学ができなかったり、できないと思い込んだりする。難しいと思ったとしても、東北大学に通っている間に一度でも留学の２文字がよぎった人は、試しに一度オンライン留学に参加してみるとよいと思う。

私は幅広く教養を身に付けたいと考えて大学に進学したが、実際、学位取得を目指す大学生活ではカリキュラム上、学際的な学びの達成は難しいとわかった。加えて感染症の影響でフィールドワークや長期休暇中の旅行に行くこともかなわず、自分でやりたいと考えたはずの勉強に対して義務感を感じるようになっていった。後退していく恐怖から逃れるために交換留学を決め、その準備の一環としてこのオンライン留学に参加した。結果として、ハイライトでも述べたように、自分にとって非常に実りある体験をすることができたし、急遽決断した交換留学に対しても、不安や迷いを払拭し前向きな気持ちで臨めるようになった。

選択科目について、私は Politics& IR と Adolescent Psychology を選択した。前者は世界史や倫理の既修者にとっては馴染みのある知識のインプットから始まり、学生が意見を交換する時間が毎授業適宜に設けられていた。後者は一般教養的な知識からやや専門的な内容にまで踏み込んで学習したが、重点は学生の自己分析と自己開示に置かれていたように思う。両者に共通するのは、教授内容を必要最低限と思われる大局の事項に絞りながら、教養ある実生活に生かすために学習するという指針が明確にされていた点である。いずれの講義も非常に満足度の高いものであった。

本プログラムで行われる授業は概して東北大学の一般的な講義スタイルとは異なっていた。レベルの高い内容を教え各自の個人学習の足掛かりにするというよりは、基礎〜初中級の内容を学びつつ、自分の既存の見識と参照対比しながら知識を咀嚼するという点が重視されているようだった。言い換えれば、参加するだけで何らかの知見を得られる授業であり、その意味で、非常にコストパフォーマンスが高いといえる。多忙すぎる春休みになることへの心配から参加を躊躇している人がいれば、ぜひこの感想を参考にしてもらいたいと思う。

必修科目である Malaysian Studies では、マレーシアの文化や生活を学ぶことができた。こちらは、旅行や海外の旅番組が好きな人にとっては垂涎の科目ではないかと思う。一般的に取り上げられにくい、複雑で多様な歴史や文化背景を持つ国の実情を、現地に生まれ育った人から詳細に聞けたことは、かなり貴重であった。Seminar Series では、毎授業異なる客員講師それぞれの研究内容について、講義を聞くことができた。マレーシア国民の問題意識は日本と異なり、自分にとってはあまり馴染みのない話題で難解だと感じることも多かったが、それだけに、自分の見ている世界の狭さを強く感じさせられ、印象深かった。

私は本プログラムに参加することができて非常に幸運であったと感じている。マラヤ大の人々、マレーシアに魅せられ、前向きな気持ちになることができた３週間であった。渡航できるようになった折には、いつか必ずマレーシアを訪れたいと思う。

自身の快適域を抜け出すことの大切さ（工学部３年　藤田修平）

私は小さい頃にタイに住んでいた経験があり、将来は経済成長の著しい ASEAN 地域で都市開発に関わる仕事に携わりたいと思っている。私は、将来の目標に向けて、東南アジアの文化や社会に触れられる機会、そして３年生になり激減した英語を使用する機会を求めて SoSHIP に参加した。SoSHIP の参加にあたり、３つの目標（①マレーシアと日本の文化間の相違点を把握できるようになること、②自分の専門外である分野の基礎的な知識を身につけること、③失敗の経験を繰り返して自分の英語に自信を持てるようになること）を設定した。本稿では、目標の達成度について述べる。

マレーシアと日本の文化の相違点については、Malaysian Studies の授業やバディとの交流を通して認識・理解することができた。例えば、マレーシアは日本よりも多文化・多宗教が共存している雰囲気の強い国である。主な宗教はイスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教などである。自分のバディはイスラム教徒であるため、毎日５回の礼拝を欠かさず行っている。自分が宗教について気になったことを尋ねると、フレンドリーに答えてくれた。また、モスクや礼拝の正装の写真もたくさん送ってくれた。宗教にあまり馴染みのない自分にとって、宗教を身近に感じる機会はとても新鮮であったとともに、考え方の違いを実感できる時間であった。

専門外の基礎知識の習得については、各授業の履修によって社会科学に関する新たな知識を習得することができたと同時に、自分の世界史や国際情勢の知識不足を痛感する機会となった。具体的に言えば、前者については、自身が履修した Seminar Series、Politics and IR、Film Studies の授業によって、幅広い社会科学の分野において課題意識や見解を持てる段階に最終的には到達できたと感じている。後者である知識不足を痛感したのは、主に Politics and IR の授業である。授業内のディベートにおいて、最近の出来事やレクチャー外のトピックと関連させた意見を述べることは難しく、思考の幅が狭いことを実感した。これを機に、ニュースを頻繁にチェックして情報収集する癖をつけようと思った。

英語に対する自信については、初週と最終週で大きな変化が見られた。初週は、緊張や自信のなさから発言することに不安しかなかったが、最終週では迷いなく自分の意見を伝えられるまでになり、成功体験を積み重ねられた。特に、Film Studies の発表で自分の言いたいことが英語でスムーズに出てきたときは自分でも驚いた。プログラムを通して変わることができた理由には、「どうしたらもっと自分の伝えたいことを正確に伝えられるか？」を日々探求して、授業内のことを振り返りながら改善を重ねていったことが考えられる。

以上をまとめると、バディたちと共に過ごす３週間はとても濃密であり、自身の快適域から抜け出して何かを得ることの重要性を実感することができた。この経験を踏まえて、様々なプログラムに積極的に参加し、将来の目標達成に向けて異文化理解力や語学力などのあらゆるスキルをさらに伸ばしていきたい。

他の文化への寛容性と配慮（文学部２年　増田千夏）

私は今まで留学することを諦めていた。奨学金をもらいながら大学に通っているため、留年などもっての外である。本分である文学部の単位や、教職と学芸員のための単位を含めると、留学の時間を確保するため早めに卒業要件を満たすということも難しかった。留学してみたい気持ちはあったが仕方がないと諦めていた矢先、オンライン留学の選択肢を知った。これだと思ったのは言うまでもない。

SoSHIP のプログラムを通して、私が得た成果を主に２つに分けて記述する。１つめの成果はマレーシアの文化を知ることができたことである。Malaysian Studies という授業や SoSHIP バディとのイブニングアクティビティで、私は彼らから様々な文化を紹介してもらうことができた。一口にマレーシアの文化と言っても、マレー系、中華系、インド系の文化など多様だ。様々な文化背景を持つ人々が、互いの文化を尊重して共存しているマレーシアの良さを実感したと同時に、多くの人がある程度同じ文化背景を共有していて、他文化への配慮をあまり必要としない日本の良さも再認識した。しかしグローバル化が進む現在、日本はきっとそのままではいられない。マレーシアは近い将来、日本が目指すべき「他文化への寛容性」を体現している国の１つなのだと思う。

２つめの成果は、スピーキング能力の向上である。SoSHIP では多くの時間を現地のバディとともに過ごすことになる。授業はもちろん人狼ゲームやストーリーテラーなどのゲームを一緒に行うため、中高の英語の授業では習わない表現や使用するタイミングを知ることができる。例えば right や cool など、リアクション言葉の使うタイミングだ。単語自体は簡単で中学校から知っているものだが、実際に使うとなると、これらの単語がどのようなタイミングで、どのようなニュアンスで使われているのか分からなかった。しかも、これらは口頭で説明されて分かるものではない。しかしバディが日常会話で使っているところを見ると、right は「まさに」「同意」という意味で、cool は「かっこいい」という意味もあるが、よりカジュアルに「いいね」という意味だと理解できた。文法を学ぶだけでは知ること

ができない細かな表現の使い方や、現在使用されている用法を知ることができたのは大きな成果であった。

最後に私がした失敗を書いておこう。バディと初めて話した時、好きな食べ物の話になった。私は餃子が好きであるため、そのように答えた。すると、バディは「餃子いいよね。中身は肉？魚？」と言ったのだ。私はなぜそのような質問をするのかわからず、豚肉だよと当然のように返答した。しかしよく考えればバディはイスラム教徒だ。イスラム教徒は豚肉が食べられないため、他の選択肢も用意されているのだろう。同じ食べ物なのに、これほどまでに違いが出るのかと驚いた一方で、イスラム教徒のバディの前で豚肉の話をしたのは無神経だったかと後悔もした。彼女が気にした様子が無かったことが救いだったが、もしこれがもっと宗教の根幹をなすような話題だったらと思うとひやっとする。文化や宗教の違う人と話すときは、自分の知識がある限り配慮して話さなければならない。これに気づくことができたのも、一つの成果だったのかもしれない。

自分の内面に対する気づきと成長（農学部 1 年　森下理帆）

今回の研修は私の中で初めてのことばかりだった。その中でも特に面白かった体験を 3 つ紹介したい。

1 つ目は Film Studies の授業だ。この授業では「人はどうして映画を見るのか」「映画の主題は何か」「映画が表現している物事は何か」などの問いについて考えた。私は映画を分析しながら見たことがなかったため、はじめはとても苦戦した。3 度目の授業でロマンス映画について分析したとき、ある映画のワンシーンから「女性らしさ」や「男性らしさ」の表現を読み解いた。今まで全く意識していなかったが、映画によって多少なりとも自分の価値観が作り上げられたことが分かり、衝撃を受けた。映画でよくあるような描写も、それを掘り下げると心の中の偏見や差別意識につながっていることもあり、この授業によってそれが炙り出されたような感覚がして、とても面白かった。自分の中の偏見に気づくという体験はそうそうできるものではなく、この授業を受講して得た成果の一つだと思う。

2 つ目は Malaysian Studies の授業だ。マレーシアは様々な民族が一緒に暮らす多民族国家である。そのため、異文化の理解を深め共存していくことが重要となる。ある生徒が「民族間で争いは起こらないのですか」と質問したとき、先生が「それはない。私たちは一つのマレーシアという国に住んでいるから」という回答をしていたのが強く印象に残っている。他民族への理解があまり進んでいない日本にいると国と民族の感覚があいまいだが、マレーシアの人々はお互いの民族を理解し、尊重し合っており、その結果、一つの国として成り立っている。この授業ではマレーシアの様々な文化・慣習が学べたが、それと同時に、マレーシアの人々の異文化理解や多文化共生の精神にも触れることができたと思う。互いを理解し、尊重し合い、様々な文化を楽しめることはマレーシアの良い伝統であり、自分自身も他の文化をより学び、理解を深めていきたいと思った。

3 つ目は Seminar Series の授業だ。毎回異なる講師がそれぞれの分野について講義を開く授業であり、全 6 回の中で最も印象に残っているのは 3 回目の講義で、テーマはマレーシア及び東南アジアの大気汚染だった。この講義を聞くまで、私は全く東南アジアの大気汚染の実情を知らなかった。普段生活している中では、自分から興味をもって調べない限り、東南アジアの環境問題について詳しく知ることはないだろう。日本にいると日本や周辺の東アジア諸国、欧米の問題ばかりが目に入ってきているように感じる。この講義の中で、インドネシアの二酸化炭素排出量が年によっては世界的にみても非常に多くなることを知り、たかが東南アジアだけの環境問題だろうと高を括っていた私は非常に驚いた。それと同時に、ここで扱っている問題は限定された小さな地域の問題ではなく世界的な課題の一つであり、私が知らないだけで、このほかにも世界的に大きな問題がいくつもあるということを思い知らされた。この講義は自分が無知であるということに気づき、より多くのことを知ろうと世界に目を向けるきっかけになったと思う。

この研修を通して、私は様々な体験をし、自分の考え方や勉強との向き合い方を変えることができた。これはただただ日本で受動的に授業を受けているだけでは成しえなかったことだろう。始まる前は不安が大きかったが、ここで得た経験は私をとても成長させてくれたと思う。ここで得たことや学んだことを、これからの大学生活や人生に反映させ、より多くの知識をもって、より多面的に物事を考えられるようになりたい。

３週間で得られたもの（工学部１年　矢澤佐千生）

このプログラムに参加した理由は２つある。一つは自分の専門である工学以外の分野について学んでみたいと考えたことである。実際の社会について知らないと、工学の知識を生かせないと思ったからだ。もう一つは、外国人との会話などで英語を使ってみたいと考えたことである。受験勉強などで今までも英語は学んできたが、実際に使った経験はほとんどなかった。このため、英語を実用する練習の機会が欲しいと以前から考えていた。

このような理由のもと参加し、まず授業では、国際政治の大まかな歴史や思想について体系的に学び、さらにはディスカッションなどを通して自分の考えを持つこともできた。また、東南アジアでの環境問題やジェンダーなど、日本の社会にもかかわりのある分野について理解を深められた。マレーシアの文化や宗教についても、ただ文献などで調べるのでは分からないことまで知ることができた。例えばマレーシアで最も信者の多いイスラム教について、私は過激派のニュースや厳しい戒律など、あまり良くないイメージを持っていた。しかしバディと語り合ったり現地のマレーシア人の皆さんと交流したりしているうちに、それは変わっていった。ただの厳しい断食だと思っていたラマダンは、その後にお祭りがあり、むしろ楽しみなものであると知って驚いた。他にも私のバディは、金曜にモスクに礼拝に行ったときの写真を見せてくれた。モスクに行かなくてはいけない、という義務というよりは、

むしろ自分の文化的なアイデンティティとして肯定的にとらえているのが伝わってきた。このように、表面的なことからはわからないところまで理解を深められた。

また普段のバディとの連絡やアクティビティ、そしてディスカッションやディベートなどを通して、3週間の間英語漬けになることができた。初めのうちは現地の学生や先生の英語のレベルの高さに圧倒され、聞きとるのがやっとだった。しかしたくさんのインプットやアウトプットを繰り返すうちに、徐々に英語を使うことへの困難さが薄れていった。特にSoSHIPは英語を学ぶというよりは、英語を使って他のことを学ぶプログラムなので、英語で授業を聞いたり、英語で自分の考えを表現して議論したりと、英語を実際に運用して役立てるという練習がたくさんできた。こういった経験は、ただ日本国内の大学で英語の授業を受けるだけでは得難いものではないだろうか。またマレーシアも日本と同様に、英語は第二言語として使われている。話す相手もネイティブ話者ではないので、発音や文法などに神経質になりすぎずに、意図を伝えることに集中することができるのも大きな利点であると感じた。さらに、普段の会話やアクティビティなどでは、比較的くだけた口語で話す機会が多かった。こういった、学校の英語教育などではあまり触れる機会のない、実用的で実際的な英語に慣れることができたのも大きな収穫だった。

そのほかに得られたこととして、自分の考えをより積極的に表に出せるようになった、ということがある。授業などでマレーシアの学生は、気になることがあったらすぐに質問したり、意見を求められると率先して話したりしていた。こういった、考えを表に出すことが自然な環境にいたことで、自分もディスカッションなどで話すことへの不安感やためらいがずっと小さくなった。また、一人ひとりの異なる意見が、とても尊重されていると感じた。自分とは異なる考えの人であっても、真っ向から反対するのではなく建設的に提案してくれる局面が多かった。このような環境のおかげで、以前よりもディスカッションなど人と自分の考えを交換し合うのが楽しく感じられるようになった。

このように、社会や文化に対して表面的でない理解を得られたほか、英語運用能力を向上させられたこと、そして、より外交的に自分を出せるようになったことなど、当初の狙い以上に得るものが大きいプログラムであった。またそれを現地の人との交流のなかで楽しみながら得られたという点からも、私にとってかけがえのない3週間になったと思う。